

永瀬清子の〈樹木〉をめぐる詩想

詩「梢」と宮沢賢治

白根直子

はじめに

永瀬清子は一九三三年に詩人になることを決めてから、亡くなる一九九五年までの約七〇年にわたって詩作を続けた。そして宮沢賢治の詩集『春と修羅』（一九二四年四月 関根書店）を手にして以来、終生宮沢賢治の人と作品を思慕し「実際の生活に於いて彼に近づく事」を目標としており^{〔注1〕}、そのことが自身の詩作に影響を及ぼしていることを自認している。また永瀬清子は宮沢賢治受容史においても重要な存在であるといえる。なぜならば永瀬清子は、第一に宮沢賢治の生前に作品を評価した数少ない一人であり、第二に「雨ニモマケズ手帳」発見の証言者であり、第三に宮沢賢治の詩の古代性と音楽性を初期に指摘した人物だからである。

一方、永瀬清子の詩の特徴の一つとしては、初期から晩年に至るまで〈樹木〉の詩を書いている点があげられ、その詩の数が少なくないことは注目し値しよう。さらに永瀬清子は〈樹木〉に対し「両手に

か、え切れぬその幹のもとに立寄ると私の中の植物的なものがしきりに共感をつたへ合ふやうに思へる」と^{〔注2〕}、自分自身と〈樹木〉を近く親しい存在と捉えているために、自身を〈樹木〉に譬えることは珍しくない^{〔注3〕}。ただし、なぜ永瀬清子が〈樹木〉の詩を書いたのか、その〈樹木〉にはどのような意味がこめられているかについての具体的な研究は少ない^{〔注4〕}。

そこで本稿では、永瀬清子の〈樹木〉の詩の中でも、「賢治さんにむかつての詩を私は時々書きました」と随筆「私の詩」（『農民芸術』第六集 一九四八年三月）で自身が言明している詩「梢」「無色ノ人」「日々」の三編のうちの一編である、詩「梢」（『諸国の天女』一九四〇年八月 河出書房）を分析し、永瀬清子の詩と宮沢賢治との関連を、〈樹木〉を鍵語として探りたい。

一 詩「梢」

まず、詩「梢」を分析することで永瀬清子が〈樹木〉をどのように

描いているかを探り、一九三〇年代前半の永瀬清子の心情との関わりを明らかにしたい。まず詩「梢」を全文引用する^①。

梢

私はほんとにわづかなものを求めてゐます^②

私にはほんの少しのものでいゝのです

でもこんなに悲しみに命中してゐる時に、

何と書いたらいいのでせう。

ことに私の愛してゐる僅かのものについては。

人々はそんな小さいことをきいて

雀のたべものをきいたやうに

たゞ笑つてしまふでせう

だから私はこんなに美しい樹木をみてゐる方がよいのです^③

あれの中には私のほしいろく々な言葉が入つてゐるのです

今日の風の中にあんなに倒れんばかりによぢれどよめき

まるで海緑色の雪崩のやうです

私の心はまるで一羽の弱い蝶のやうに

その中へたえくゝに駆け入つて

びつたり一本の幹に押しついてしまふ

幹と共にゆれながら

私は茫然と心を木にあづけてゐると

緑の中から飄々と降りてくる人があり

か^④の人は私の肩をたゝいて

「こゝろのめぐら、こゝろのめぐら」と

わらつて云ふのです。

(傍線筆者・以下同)

ここで詩「梢」の発表時期を確認しておく。詩「梢」は、同人誌『五人』第八集(一九三三年七月)が初出である。続いて随筆「宮沢氏についてまた」(「麵麴」第三卷第八号 一九三四年九月)の中には、初出形の詩「梢」を引用している。さらにこの随筆「宮沢氏についてまた」の随筆の内容を一部削除のうえ同じ題名で『岩手日報』(一九三四年九月二日)に転載し、その後詩集「諸国の天女」に再録している。

まず注目したいのは、この同人誌『五人』に発表した詩「梢」には「宮沢賢治さんが緑の中から漂々と降りて来て」の詩句があることである。永瀬清子が宮沢賢治の詩集『春と修羅』を読んだ時期について具体的な記述をしているのは、「宮沢賢治についてのアンケート」(四次元)第二卷第九号 一九五〇年一〇月)に「多分昭和七年(ろのこと)」^⑤とあるのが最初である。けれども「昭和七年」と書いているのはこれのみであり、かつ永瀬清子自身が、この次に詩集『春と修羅』を読んだ時期について具体的な記述をしている随筆「宮沢さんと私」(四次元)第七卷第四号 一九五五年四月)以降は「昭和八年」と書

いているために、これまでは一九三三（昭和八）年とされてきた。ところが永瀬清子が、この「宮沢賢治さんが緑の中から漂々と降りて来て」の詩句がある詩「梢」を、一九三二（昭和七）年七月に発表していることから「昭和八年」は誤りであり、詩集『春と修羅』を読んだ時期は一九三二（昭和七）年七月以前と考えられる。

次に詩の内容について考えてみたい。永瀬清子がかねてから詩を書くときに、「一番肝心なところから第一行をはじめてほしい」と第一行目を重視している^{注5}。したがって傍線①にあるように、「私」の求めるものが「ほんとにわづかななもの」であると述べていることに注目したい。さらに次行でも求めるものが「少しのもの」と繰り返していることから、「私」の望みはわずかなものではあるが強いことがうかがえる。

傍線②からは、「悲しみに命中してゐる時」に「私」の本当の心、すなわち本質を言い尽くせないでいるとまどいが見い出せる。つまり傍線①にある「私」の求めるものとは、本質を表現できるといえずう。この傍線②を、思潮社版『永瀬清子詩集』（一九七九年六月）では「何と言葉にしたらいいのでせう」に変更していることから、本質を言語化できないで苦悩していることがわかる。すなわち「私」が求めるものは「私」の本当の心を表現できるわずかな言葉であるにも関わらず、それを自分のものにするのがかなわないという思いが発せられているといえよう。そのうえ、「私」の「悲しみ」を言語化できないことで、「私」の「悲しみ」をより強くしていると思われる。このこと

は永瀬清子が詩を書き始めた理由を、「誰かに自分の本当の心の内を知って貰いたいという願い」^{注6}と考えたことにも関わるのではないだろうか。

このように「悲しみ」と「言葉」の語は永瀬清子の詩にとって大変重要な語であると思われることから、それぞれの語の用例を本稿が対象とする詩五二一編の中からみてみたい^{注7}。すると「悲しみ」の用例は三〇編で三五例あり、「かなしみ」は九編で二三例ある。そこで永瀬清子が「悲しみ」や「悲しい」「悲しむ」といった表現をする場合を分析すると、自分の心を正確に表現できない悲しみ、人間関係の難しさに対する悲しみ、肉親や夫など家族に対する悲しみ、老いへ向かう悲しみ、女性が生きがたい社会に生きる悲しみを表現する傾向がある。次に、「言葉」の用例は五一編で六五例あり、それらは主に二つの傾向、すなわち、単に言語表現を指す傾向と気持ちを正確に表せる表現を指す傾向とがある。そして永瀬清子は後者の気持ちを正確に表せる表現を求めているが、そのように表現できないときに「悲しみ」を抱いている。したがって傍線②の「悲しみ」は前掲の「悲しみ」と表現する傾向のうちいずれかに該当する「悲しみ」と、そのことを正確に表現できない「悲しみ」が重なり合っていると思われる。

傍線③では、そのような「私」であるから自分の本当の心を表現しようと苦心するよりも、「美しい樹木」をみるほうがよいと考えている。ここで悲しんでいる「私」の気持ちを転換させるために「美しい樹木」が登場している。この「美しい樹木」には傍線④にあるように

「私」にとつて「ほしいろ／＼な言葉が入つてゐる」ために、ここで「私」と「美しい樹木」は対比がなされている。つまり「私」の心を表現できるわずかな言葉を求める「私」と「ほしいろ／＼な言葉」を内包する「美しい樹木」との対比といえよう。

そのように「私」と対比されている「美しい樹木」が、強い風に吹かれて激しく揺すぶられている様子は「美しい樹木」の「悲しみ」を表現しており、「私」には傍線⑤にあるように「海緑色の雪崩」に見える。この「海緑色の雪崩」とは、「ほしいろ／＼な言葉」を内包する「美しい樹木」から溢れ出る言葉の様子を表現しているのではないだろうか。つまり、その言葉は「幹」の中にあり「海緑色の雪崩」に見える「葉」になつて現れたといえよう。すると「美しい樹木」は単に「美しい」のみならず、「悲しみに命中」しても、その「悲しみ」さえも豊富な「美しい」言葉で表現することができるといえよう。

この様子を目の当たりにした「私の心」は、傍線⑥のように幹と一体化し「幹と共にゆれ」ている。そうすることで「私」には「悲しみ」を表現できる「いろ／＼な言葉」を手に入れられるかもしれないという期待があることがうかがえる。

ところが「私」の「美しい樹木」に対する期待は外れていく。傍線⑦は、初出と随筆「宮沢氏について」では、「宮沢賢治さんが緑の中から漂々と降りてきて」と表現している。つまり、「ほしいろ／＼な言葉」をもつ「樹木」と「宮沢賢治さん」が高いところから降りてきており、「樹木」も「宮沢賢治さん」も永瀬清子が願う本質を表現で

きる存在の象徴として表現しているのである。よつて傍線⑧の「かの人」とは、当初は宮沢賢治を想定していたが、傍線⑦のように「緑の中から飄々と降りてくる人」に変更したことで、宮沢賢治のみならず本質を表現できる存在全てを「かの人」と呼んだと思われる。

これら「かの人」の姿に照らした「私」の姿として、傍線⑨の詩句「こゝろのめくら」がある。ここで「かの人」が「私」を「こゝろのめくら」ということによつて、「私」という小さく弱いものが「樹木」という大きなものにあこがれていながらも、自分自身の価値を顧みないことや、物事の本質をみていないことに気づかされたことを表現しようとしているのではないだろうか。であるから、永瀬清子は「私」と「かの人」との違いを、本質を表現できる存在とできない存在の違いとして、「私」を「梢」の題名で表現したのではないかと考えられる

(注10)

このように永瀬清子は、詩「梢」で「樹木」と言語表現とを等しく捉え、本質的な表現ができない「私」と本質的な表現ができる「樹木」を対比している。しかも、「樹木」の中でも「幹」に「ほしいろ／＼な言葉が入つてゐる」ことから「梢」と「幹」の対比でもあろう。ここには思うように詩作ができずに悩む一九三〇年代前半の永瀬清子の心情が反映しているのではないだろうか。そして永瀬清子にとつて「樹木」のように本質的な表現ができる存在が、宮沢賢治であつたと考えられる。

二 永瀬清子と〈樹木〉

では、永瀬清子は詩「梢」を書いた頃（樹木）についてどのように考え、詩「梢」以外にはどのような（樹木）の詩を書いていたのであろうか。

そこで、永瀬清子の随筆「私の詩」には、この詩「梢」と詩「無色ノ人」を宮沢賢治にむけて書いた状況について「高円寺に住んでゐた頃のものではつきり記憶しませんが昭和十年か十一年頃のものでせう。私の家は櫻の木立にかまれてゐました」とあることに注目したい。^{〔注10〕}

永瀬清子は一九三二年四月から「東京市杉並区高円寺一ノ十五」に住んでおり^{〔注11〕}、「消息」〔『輝夕』第七年第三号 一九三九年二月〕には、「永瀬清子氏世田谷区北沢二ノ二九へ」とある。したがって一九三一（昭和六）年四月から一九三九（昭和一四）年一月までは高円寺に住んでいたと思われる。

さらに、昭和一〇年に永瀬清子が書いた随筆「樹木の中に」〔『麵麴』第四卷第八号 一九三五年八月〕には、高円寺の家を囲む櫻についての記述がある。

並木の櫻はこのあたりにまだまだ沢山残つてゐて防風林のやうであつたが道路拡張工事の時きられて今は私の前の小さな通りに、十数本、その直幹の亭々といまだに空にむかつて地の情熱をつたへる如く、その枝をつねにゆるがせてゐる。両手にかゝえ切れぬ

その幹のもとに立寄ると私の中の植物的なものがしきりに共感を
つたへ合ふやうに思へる。

傍線⑩より永瀬清子は自分と〈樹木〉とが、近く親しい存在であると捉えていることがうかがえる。永瀬清子は、この高円寺の家について「使ひ勝手がわるく」、家賃が「高いとみんなに云はれて、その気になるが仲々変れない」と述べており、その原因を「どうも周囲の樹木の牽引であるらしい」と、家の周囲にある柿、椿、櫻といった〈樹木〉が、自分をひきとめているためであると解釈している。

永瀬清子のこうした〈樹木〉や植物への親しみは、ごく初期に書いた詩「土の表現」〔『新生』第五卷第二号 一九二八年二月〕に顕著に表れているのではないだろうか^{〔注12〕}。永瀬清子はこの詩で「土の精神にこもりきれぬ感情や意志が／沈黙よりあふれて表現に富める植物とはなる」と土を擬人化し、植物というのは、土の感情や意志が表現した作品であると捉えている。するとこの随筆の記述には、詩「土の表現」を書いた八年前と変わらぬ詩想があることと、永瀬清子の詩作も「空にむかつて地の情熱をつたへる如く」行われていることがうかがえる。こうしたことから、永瀬清子が〈樹木〉を眺めていたことは、少なからず詩作に影響を与えていたと思われる。

そこで詩「梢」と同じく、「梢」の語を使用する短章「象徴の厨子」〔『諸国の天女』を全文引用したい^{〔注13〕}。

象徴の廚P

妹よ

川の水があふれるのは水があまりに豊富なためとばかりはかき
らない。

川が石ころで塞がつてゐるのかも知れない。

私が詩をいぢるのは果してどちらのせみだらうか。

私は恥かしい。

詩や、慰めや、絆瘡膏のいらぬ生活が心からほしい。私には
詩は鬘でも旗じるしてもない。思ふに幹のやうに太くなれない木
の枝が梢でさわいであるのだ。

動かさずわがぬ木の根っこに腰をおろしたい。あまりにも分裂
しつくす私の醜態。

^註水と空気は消化されて幹をかよつた。樹液は水か。美しい木理
は土か。

生活の忘却。生活の調整。

あ、私にとつては要するに生活のジグザグから傍流するのだ。

生活の充満。一路の失走。

妹よ。

短章「象徴の廚P」は初出では「ノート」〔五人〕第三集 一九三一年三月の題名で発表している。この短章「ノート」は短章「廚の比喩」より〔磁場〕第二号 一九三一年）などと共に短章「象徴の廚」〔諸国の天女〕にまとめて再録している。また発表時期が一九三一年三月であり大阪から東京へ転居する直前であることはもちろん、永瀬清子が時代に即した新しい詩を学ぶため北川冬彦に同調する意志を固める直前の時期であることを念頭におく必要があるだろう。

永瀬清子は短章「象徴の廚P」で傍線①のように「詩」を〔樹木〕に譬えている。まず「梢」に譬えた「詩」を「幹のように太くなれない」うえに「あまりにも分裂しつくす私の醜態」と、細く枝分かれしている様子を否定的に表現している。つまり「梢」は表現しようとすることを掴みきつていなかったり、的確な言葉で表現できなかったりするために、言葉を費やすものの本質を表現するに至らない「詩」と考えられる。これは詩「梢」の「美しい樹木」が傍線⑤の「海緑色の雪崩」のように的確で豊富な言葉をもつとは対照的であろう。

すると、逆にいえば「幹のように太くなれない」とあることには、「幹」のようになりたいという願いがうかがえ、「幹」が本質的な表現で書くことのできた「詩」を指すといえよう。こうしたことから、永瀬清子は詩「梢」で「私の心」を傍線⑥のように「幹に押しついでしまふ」と表現し、「幹」と一体化することで「幹」のように本質的な表現ができるかもしれないという願いと期待を表現したのではないだろうか。

このように永瀬清子は、「詩」や「私」を（樹木）に譬えているもの、（樹木）の中心である「幹」ではなく、前述したように末端の「梢」である現状をふまえつつ、「幹」でありたいという願いを書いていると考えられる。この願いはいくつもの作品に反映していることがうかがえる。

そこで詩「梢」を再録している詩集『諸国の天女』の他の詩における（樹木）を確認してみたい。同詩集のなかで詩「白昼」（『詩之家』第七年第二号）は、第一詩集『グレンデルの母親』を出版したわずか二か月後の一九三一年一月に発表した詩である。この詩では「ステニ錆ピタル武装ハ／古葉ノゴトク身ヨリ落ツ／我ハ倒木ノゴトクシテ／カ、ル苔類ノ咲クニマカセントス」と（註15）、「倒木」ではあるが「我」を「幹」に譬えている。

しかも、詩「麦死なず」（『文学案内』第二巻第六号 一九三六年二月）では、「私は深い羨望をもつて／その葉のない幹をあふぎみる」（註16）「願わくば我が運命が葉ではなく幹にあることを」と、「幹」でありたいと強く願う詩句がある。

したがって、永瀬清子は（樹木）を親しい存在であると同時に言語表現をする存在と捉えているが、なかでも「詩」と等しく捉え、さらには本質的な表現に関わるのが「幹」であると考えているといえよう。さて、このような永瀬清子の「幹」や「梢」に対する視点、ならびに短章「象徴の厨P」の傍線②とともに注目したいのは、評論「十一月のペン」（『磁場』第四号 一九三二年一月）である。というのも、

永瀬清子がプロレタリア文学のイデオロギーに基づいた文学論や文学のありかたに対し、否定的な立場をとっていることが重要なからである。こうした立場をとった理由には、永瀬清子が一九三一年四月に佐藤惣之助の『詩之家』を離れ、北川冬彦に同調し詩誌『時間』の同人になったことがあげられる。そのため永瀬清子は評論「十一月のペン」においてインテリゲンチヤの立場で、宮本顕治の評論「小林秀雄論」（『改造』第一三巻第一二号 一九三二年二月）に具体的に言及している。

宮本顕治は、評論「小林秀雄論」で小林秀雄の批評に対して「とりあげられた対象人物が、その存在の社会的根拠を解明されたことは、かつて一度もない」という観点から、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』を論拠に「人間の本质、即ちその『社会関係の総和』を究明する方向こそ批評の唯一の道ではないか」と、人がどのような社会に生きているかを究明することが文芸批評であると考えている（註17）。この考えに対し永瀬清子は次のように批判している（註18）。

現実生活過程の基本的契機を探ることが、又社会関係の総和を究明することが文芸作品の批評に於いても終局の問題であらうか。私は思ふ。これら「契機」及び「総和」が人間の全存在を潜称（註19）すると云ふことはまことに一迷妄と云はねばならない。これら人間意識の土台ではあるが、決して全人間ではあり得ない。つまり植物は風土に決定的な支配を受けはするが植物の中に流れてゐる樹液は果して地下水、雨水であらうか。木理は、肥料、土壤の

たぐみであらうか。

永瀬清子はどのような社会に生きるかで「人間意識の土台」が左右されるという可能性については認めているが、その社会の「究明」により、そこに生きている人間の全てを「究明」できると考えることを疑問視している。そこで永瀬清子は傍線⑬のように人間の全存在を説明するために、人間を（樹木）に譬え宮本顕治を批判している。つまり「植物」は「風土」という生きる社会により制限を受けることはある。けれども「植物の中に流れてゐる樹液」がそのまま「地下水、雨水」ではなく、「木理」もそのまま「肥料、土壌」ではないように、どのような社会に生きているかの「究明」では人間の全てを究明し難いと考えている。

よって、この評論「十一月のペン」での主張は「まことに芸術は全人間と全人間の交渉であらう」の一文にあるといえよう。つまり永瀬清子は、文芸作品の創作とそれに対する批評は、「全人間と全人間の交渉」として全人的に行うことが必要であることを主張しているのである。

さらにこの傍線⑬の内容は（樹木）を例にしている点で、短章「象徴の厨P」とも関わるのではないだろうか。まず傍線⑪については前述のように本質的な表現をもとめる願いがうかがえ、傍線⑫は「水と空気は消化されて幹をかよつた。樹液は水か。美しい木理は土か」と、傍線⑬の語と共通するうえに、その内容を象徴的に表現している。つまり、本質を捉えることで全人的な表現ができるといふ考えを背景にもつと思われる。

そのうえ評論「十一月のペン」で永瀬清子は、「存在そのまゝ、の切り取りは自らの詩心に詩眼にむしろ稟質に反してあると思へた」と、物事をそのまま記述することへの抵抗があったにも関わらず、「一木一石を見落すまい」と全てを見て書きたいという意欲を抱いている¹¹⁶。そのため「一ツの原稿を完成するのに今までは次第次第に消して行つた。これからは次第次第に緻密なものとしてゆく。この文自身最初たゞ原稿用紙一枚に瀟洒と片づけてあつたのだが」と言葉を削除するのではなく補足していくことを述べている。

このようにみていくと、傍線⑬と短章「象徴の厨P」の傍線⑫の論旨と語の共通性があることから、評論「十一月のペン」の原形は、短章「象徴の厨P」なのかもしれない¹¹⁷。ここには時代に即した新しい詩を学ぶために佐藤惣之助のもとを離れ北川冬彦に同調したものの、イデオロギーに基く文学にも形式を重視する文学にも満足できない永瀬清子の二つの関心がうかがえる。すなわち表現しようとする内容がどのような形式で書くかという関心であり、それらが一致した文学が人間の全てを究明する文学ではないかという関心である。この二つの関心のもとに、永瀬清子は詩「梢」で、形式と内容が一致し全人的な表現をしている「美しい樹木」と、そのように表現できない「梢」のような「私」との対比をしたのではないかと考えられる。つまり「美しい樹木」であっても天候や季節の変化の影響を受けるように、人間であれば好調不調があるように、あらゆる状況や感情などの変化に対し、どのように感応するかに関心があるからではないだろうか。また

永瀬清子は新しい詩を学びながら相変わらず本質的な表現で詩を書くことができないために、詩「梢」でも短章「象徴の厨P」と同様に「梢」の語にそのことを象徴し、詩「土の表現」に表現した（樹木）の詩想を継承したと考えられる。

このように、永瀬清子は詩「梢」で（樹木）を言語表現と等しく捉えていたが、永瀬清子の詩作も同様に行われていることから（樹木）と詩を等しく認識している。しかも（樹木）の末端の「梢」や「葉」ではなく、地下水や肥料など土壌から取り入れた養分を（樹木）全体に行き渡らせる「幹」のような詩を書きたいと願っている。換言すれば永瀬清子は物事を消化し血肉とした結果、形式と内容が一致するような全人的な表現を目指しているといえよう。

三 宮沢賢治との出会い

ならば、永瀬清子が全人的な表現を目指し、宮沢賢治の人と作品を思慕した理由は何であろうか。そこでここまで行った詩「梢」と（樹木）についての考察ならびに、永瀬清子が宮沢賢治に出会うまでの文学体験をふまえ、宮沢賢治との出会いについて確認してみたい。

永瀬清子は、一九二三年に『上田敏詩集』を読んで詩人になることを決意し、愛知県立第一高等女学校英語科に進学している（一九二四年四月〜一九二七年三月）。そして永瀬清子は三年生の時に、同校の英語教員吉岡千里より、立教大学時代からの親友である宮川哲朗を紹介

され、タゴールやブレイク、ホイットマンなどについて講義を受け関連する本を貸与されている。また詩を書き始めた永瀬清子が、宮沢賢治に出会う以前に強く惹かれていたのは、そのタゴールやブレイク、ホイットマンといった「人間的な不完全な『詩人』」^{〔註21〕}すなわち詩人とが一致した詩人であったことを述べている。こうした詩人たちの詩を読んだ経緯について、永瀬清子は次のように書いている^{〔註22〕}。

私は柳宗悦訳の『ギリアム・ブレーク』だとか、増田三良訳のタゴール詩集『ギータンジャリ』などを繰返し読んでいたのでその影響が長くつづき、「詩之家」の他の同人たちとはかなりちがった詩風だった。やや重くるしくきまじめで、若い女性らしい軽やかさが少なかった、と今思う。

ここで傍線④では、永瀬清子は訳者を「増田三良」と書いているが、「増野三良」の誤記と思われる^{〔註23〕}。この増野三良訳の『印度新詩集ギータンジャリ（贄祭の歌）』にはイエーツが序文を寄せており、永瀬清子がタゴールの詩にふれる際、引用することの多い「極めて豊饒で極めて単純」の表現がある。さらにイエーツがタゴールの詩を「卓出した^{〔註24〕}教養の作品であつて、しかもそれらは雑草や茅と同じ様に通常の土壤の発生に過ぎない」^{〔註25〕}と土から植物が生えてくるように、詩が詩人の内面から生まれてくると考えていることは注目されよう。

そのタゴールの詩「私の血管を流れて居る生命の同一の流」^{〔註26〕}には、「世界の塵埃から草の無数の葉を歓喜に生じてゐるのも、また木の葉や花の騒々しい波を起すのも同一の生命である」とある。前述のよ

うに永瀬清子は、詩「土の表現」で植物は土の感情や意志が表現した作品であることを書いている。このことから自身と植物ならびに芸術を等しく捉え、かつそれらの存在を生命の発露と考えている点で、タゴールと永瀬清子の詩には通じるものがあると思われる。

続いてブレイクであるが、永瀬清子は柳宗悦の『キリアム・ブレイク』（一九一四年二月 洛陽堂）を読んでいる^{（註28）}。柳宗悦はブレイクについて、「人間がその仮面を脱いで人間そのものを露出しない所に決して真理は生れ出ない」と全人的な表現を指向していること^{（註29）}にふれ、そこに愛を見出ししている。しかも柳宗悦はブレイクの全人的な表現を「自己寂滅」と捉え「心を自然の懐に託して自らを愛の世界に忘れ去る時、吾々は只永遠な神に対する光景に生きてくる」と、自然に没入し自分を忘れ去るまでになったときに可能であると考えている。柳宗悦がブレイクに見出したこのような全人的な表現への指向と、永瀬清子が評論「十一月のペン」に、人間の全てを究明する文学に関心を抱く記述をしたことは無縁ではないだろう。

さらに永瀬清子は、宮川哲朗からホイットマンの詩集を借りて読んでいる^{（註30）}。ホイットマンの詩「自己を歌ふ」には、「あなたはまた私の眼を通じて物を見たり、私の手からそれを受け取るやうなこともしまい、／あなたは自ら四方に耳傾け、あなた自身から物事を濾し取るだらう」の詩句がある^{（註31）}。つまり、物事を自分の目で見て捉えていくということであり、「私」を中心に物事を考えることを述べている。この考えは詩「梢」で物事の本質を見ることのできない「私」を

「こゝろめくら」の詩句で表現したことや、さらには、永瀬清子が詩に「私」を多用することにも関わってくると思われる。

しかも宮川哲朗の講義について永瀬清子は、「トルストイのこと、ニイチエのこと、デルタイのことキエルケゴールのことなんでも御座れだつた。彼は一種の哲人でその論点は生命の哲学とでも云つたものにあつた」と豊富な知識に驚きを示し、それらを「生命の哲学」という点で共通すると捉えている。したがって、愛知県立第一高等女学校時代に宮川哲朗や吉岡千里と接したことで、永瀬清子には、はからずも大正時代の生命の思潮が深く浸透していたといえよう。

このような文学体験を経た永瀬清子は、自分の目で見、自分の言葉で書くことを重視する佐藤惣之助に師事し、一九三〇年に第一詩集『グレンデルの母親』を刊行した後、詩作に対し主に二つの悩みを抱いていたことを述べている。第一にシュールレアリズムに対する違和感であり、第二に階級闘争により立場の自覚を自身の問題として促されていたことである。これらの問題に直面した永瀬清子は、前述のように北川冬彦に同調しインテリゲンチヤの立場を選んではいるが、違和感を覚えてもいる。そのために「もっと『自分の自然』に近いものを書きたいと思うようになり、一方では、本当の詩人とははたしてどうした人なのだろうか」と^{（註32）}、永瀬清子の本当の心が表現できる詩を書くためにはどうすべきかに思考を進めている。

つまり、永瀬清子は宮沢賢治に出会う以前、タゴールには生命の発露の詩を、ブレイクには全人的な詩を、ホイットマンには自分の目で

「私」を中心にした詩を得ていたが、同時代の日本の詩人からはこのような詩人の内面にある生命と詩と人が一致した詩は得られなかったといえよう。

ところが、永瀬清子は宮沢賢治の詩集『春と修羅』に出会ったことで、宮沢賢治にむけて詩「梢」を書き、さらに詩集『春と修羅』の感動を書いた評論「ノート」(『麵麴』第二巻第七号 一九三三年八月)を発表している。永瀬清子は評論「ノート」で宮沢賢治の詩作について、「自然とけぢめもつかぬまでにとけ合ひ、客観した自然をうたふと云ふよりは、彼の内部の自然をあとからくとさらけ出したのだ」^{〔註31〕}と述べている。つまり宮沢賢治の詩は自然に没入しながらも、自分の内部でその自然を消化し血肉とした結果の詩であると考えている。

しかも「見るが早いか何物かが醗酵し驚ろきの感動をぶちまける」と、宮沢賢治が眼前の現象を自分のものにしたうえで、詩として表現する時間の速さに驚いている。永瀬清子は、詩「梢」で強風にあおられる(樹木)を傍線⑤のように「海緑色の雪崩」と表現している。この表現は、現象に対して即座に感応し言葉にできることといえ、永瀬清子が宮沢賢治の詩に感じたことが反映していると考えられる。またこうしたことは、詩「梢」のみならず、宮沢賢治にむけて書いた三編の詩全てに共通することではないだろうか。

まず、二編目の詩「無色ノ人」(『セルバン』第一一〇号 一九四〇年三月)で、永瀬清子が宮沢賢治を「無色ノ人」と捉えていることは注目に値しよう。この詩「無色ノ人」では「壮ナル個性モテル人

ハ／絶壁ノゴトクソバダチテ」^{〔註32〕}と旺盛な「個性」をもっている人が「絶壁」のように一段と高く立っているという詩句があり、その「人」がいかに「我」にとつて大きな存在であるかがうかがえる。ここには、永瀬清子にとつての宮沢賢治の存在の大きさもこめられていると思われる。ならば永瀬清子が評論「ノート」で「自然に対して古代人的な神話作者的な驚きの氾濫を感じてゐる」と^{〔註33〕}宮沢賢治の感受性の幅広さと深さを述べているのは、この「驚きの氾濫」を「壮ナル個性」と捉えたためではないだろうか。

しかも、その「人」は「無色」であるので何にも遮られないために、その向こうにある対象をはっきりと見ることができよう。つまり、物事の本質がはつきりに見えるために直ちに的確な表現ができるといえよう。したがって「無色ノ人」は、全ての物事を直ちにはつきりと捉えることのできる人を表現していると考えられる。

ならば、三編目の詩「日々」(『美しい国』一九四八年二月 炬書房)の「見えない貴方」も同様の意味で書いた詩句といえよう。すると、永瀬清子が詩「梢」で「私」を「こ、ろのめくら」と表現したのは、「美しい樹木」を仲立ちにしたり、言葉を借りたりして「私の心」を表現するのではなく、「私の心」が何にも遮られずに対象を見、「私」の言葉で「私の心」を表現すべきであることを述べていると考えられる。このように永瀬清子は宮沢賢治の詩が本質を捉えた詩であると考え、永瀬清子自身もそのようにありたいと願う心を詩や評論で表現していることから、「私」を表現する形式と内容に対する関心があるといえよう。

さて、宮沢賢治の詩集『春と修羅』に出会った永瀬清子にとってもうひとつの大きな出来事は、一九三四年二月に開催された宮沢賢治追悼会である。永瀬清子はこの会で「雨ニモマケズ手帳」が発見され、そこに居合わせたことを晩年まで機会あるごとに書いている。またその手帳に書かれていた詩「雨ニモマケズ」は永瀬清子にとって最も縁の深い作品であり、手帳発見から五〇年後には詩「雨ニモマケズ」を「自分の問題として」（傍点原文）受け止め、「このようにあればはじめて人は安らかであり得る」「夢の構図」すなわち人生の指針と考える随筆「宮沢賢治のほとりで」（『宮沢賢治』第四号 一九八四年五月）を発表している（註）。つまり、永瀬清子にとって宮沢賢治は「永遠の未完成これ完成である」と完成にむかっている詩人であるために、「私」の形式と内容に対する関心を抱き、詩作により「私」のかたちの完成を目指す、永瀬清子にとって目標であったのではないだろうか。

もちろん前述のようにタゴール、ブレイク、ホイットマンといった詩人から受けた影響は、その後の永瀬清子にも少なからずあるであろう。けれどもとりわけ宮沢賢治は、永瀬清子にとってこれまで同時代の日本の詩人からは得られなかった詩を書く同時代の日本の詩人であり、かつブレイクやタゴール、ホイットマンのように「人間的な完全な『詩人』」ではなく、生命のかたちの完成を目指している詩人である。後年、永瀬清子が「この追悼会でそれらの事（＝宮沢賢治が生命のかたちの完成を目指している詩人である事・筆者注）がすぐ判ったのではないが、その時は受けとる面でもたしかに今と時代的にもちが

っていた」と考えていることも、生命のかたちの完成を目指し続けてきた表れであろう。

先に、永瀬清子が、表現しようとする内容をどのような形式で書くかという関心と、それらが一致した文学が人間の全てを究明する文学ではないかという二つの関心をもつこと、そして詩と〈樹木〉を等しく認識していることを述べた。すると葉を茂らせたり花を咲かせたり落葉したりといった季節のめぐりによる〈樹木〉の変化は、〈樹木〉自体の内容と形式の一致した表現でありながら、生命のかたちの完成を目指す意志の表れといえよう。永瀬清子が詩を〈樹木〉に譬え、「私」の詩を書く理由はこの意志にあると考えられる。

以上より、永瀬清子はタゴール、ブレイク、ホイットマンといった詩人が全人的で完全な詩人であると考え敬意をはらっていることがうかがえる。けれども永瀬清子が、そうした詩人ではなく宮沢賢治の人と作品を思慕し、宮沢賢治にむかう詩を書いたのは、宮沢賢治が本質を捉えた詩を書くばかりではなく、完成にむかうために詩作を続けたと考えているためといえよう。そして永瀬清子の〈樹木〉の詩は、生命のかたちの完成にむかう意志と考える。

おわりに

このように永瀬清子は第一詩集『グレンデルの母親』を出版した後、詩作についての悩みを抱いていたが、大正時代の生命の思潮の影響の

もと、宮沢賢治の人と作品に自らの目標を見出している。また、永瀬清子は〈樹木〉を自分の仲間と考え、一方では詩を〈樹木〉のように土の感情や意志が表現した作品と捉えている。永瀬清子がかかるように詩と〈樹木〉を捉えたことには、自身の生命のかたちの完成を目指す意志があるためと考えられる。

しかも永瀬清子は〈樹木〉のなかでも「幹」を重視しており、そこには永瀬清子の生命観、詩の形式と内容への関心、「私」の語の多用といった問題につながっていると考えられることから、〈樹木〉の詩をめぐって考察することは永瀬清子の詩人像を明らかにする点で意義深い。本稿では、ひとまず永瀬清子が宮沢賢治を思慕した理由と、物事を血肉とした結果の全人的な表現を目指す永瀬清子の生命のかたちの表現としての〈樹木〉の指摘にとどまったが、今後、これらにつながる諸問題との関連を考察し、深めていきたいと考えている。

テキストは、原則として詩集所収の詩は初出の初版本によるが、そのうち初出誌が判明している詩については、発表年次を明らかにするために併記した。旧漢字は新漢字に改めた。また作品中には現在不適当な表現があるがそのまま引用した。傍線ならびに傍線の番号、傍点、「」内補記は全て筆者による。

注1 「雲の信号三」「イーハトーヴォ」第二期第三号 一九五五年二月 六頁

- 2 「樹木の中に」『麵麴』第四卷第八号 一九三五年八月 五一頁
- 3 詩「白昼」(『諸国の天女』一九四〇年八月 河出書房)、「一日昔の風が」(『薔薇詩集』一九五九年七月 的場書房)、「一本の幹で」(『海は陸へと』一九七二年九月 思潮社)、「プラタナス」(『続永瀬清子詩集』一九八二年八月 思潮社)などがある。
- 4 虫明美喜の解説「飛ばない天女の詩」(『ひつじアンソロジー詩編』一九九六年七月 ひつじ書房)は、「樹木の、その生命の源、成長を支える計り知れぬエネルギーに永瀬は注目する」と樹木と生命について指摘している。
- 5 四九〇～五〇頁
- 6 『宮沢賢治研究資料集成』第七卷 一九九〇年六月 日本図書センター 二三八頁
- 7 「いい詩とは何か?」『詩学』第四七卷第九号 一九九二年九月 詩学社 三七頁
- 8 『すぎ去ればすべてなつかしい日々』一九九〇年六月 福武書店 五一頁
- 9 本稿が対象とする詩の数と用例数は次の基準による。
 - ①数編の詩を組み題名を付けた組み詩は、組まれた詩一編ずつを詩の数とした。
 - ②詩集の中には、永瀬清子が詩と散文の間と考え「短章」と呼ぶ独自の形式が含まれた詩集があるが、ここでは詩集に採録という観点から詩の数に含めた。

③題名も用例に含めた。

④複数の詩集に収録されている詩については、そのうちの初出詩集から用例を採った。そのため詩の数は、実際の詩集の所収数の合計とは異なり、本稿が対象とする詩は五二一編である。

10 ここでの認識は、一九四六年に帰農し農婦の生活から生まれた詩「日々」(『美しい国』一九四八年二月 炉書房)でより確かなものになっていったと考えられる。

11 五八頁

12 熊山町編『永瀬清子の生涯』一九九八年三月 熊山町 一四頁

13 『グレンデルの母親』一九三〇年一月 歌人房 八二〜八三頁

14 二〇二〜二〇三頁

15 『諸国の天女』一九四〇年八月 河出書房 二二頁

16 注15に同じ 九五〜九六頁

17 『日本プロレタリア文学評論集・五 宮本顕治集』一九九〇年九月 新日本出版社 一八八〜一八九頁

18 「十一月のペン」『磁場』第四号 一九三二年一月 磁場社 三一頁

19 注18に同じ 二八〜二九頁

20 永瀬清子は「短章」について「あとがき」(『短章集』一九七四年四月 思潮社 一〇八頁)で次のように述べている。

詩そのものよりずっと楽な姿ですが、「詩」と対蹠する意味の「散文」(つまり随筆とかエッセイ)でもない上に「散文詩」と云うほど風采ととのわないのです。(中略)

思えばずっと若いときから私はこの形を、私をとりまく非詩的な時間のすき間から、釣りあげておくことを習いとして来たのでした。

このように詩と散文の間にある形式で、厳密に定義し難いといえよう。「短章」の語は「詩集例言」(『グレンデルの母親』一九三〇年一月 歌人房 五頁)にまずみられ、以後「短章」(『麵包』第四卷第一号 一九三五年一月)がある。

21 「渦巻の川」わが詩作の五十年」『世界』第三八二号 一九七七年九月 岩波書店 三四〇頁

22 「本当はどうなのだろう」『光っている窓』一九八四年六月 編集工房ノア 五六〜五七頁

23 永瀬清子が『詩之家』に参加する一九二八年一月までに刊行されたタゴールの詩集『ギータンジャリ』は、国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』(一九七二年 風間書房)によると、蘇武緑郎訳タゴール傑作全集『ギータンジャリ』(一九一五年 文正社)と、増野三良訳『印度新詩集ギタンチャリ』(一九一五年 東雲堂書店)の二冊がある。

24 「序」『印度新詩集ギタンチャリ』(贗祭の歌)一九一五年三月 東雲堂書店 一四頁

25 注24に同じ 一五五―一五六頁

26 一九二七年までに永瀬清子が読むことのできたブレイクの詩集

の訳本は、国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』

(一九七二年 風間書房) より次の四冊がある。日夏耿之助訳『英

国神秘詩鈔』(一九二二年 アルス)、山宮允『アルス泰西名詩選

五 ブレイク抒情詩抄』(一九三二年 アルス)、『泰西詩人叢書六

編 ブレイク詩集』(一九三三年 聚英閣)、尾関岩二訳『世界名

詩選一―ブレイク詩集』(一九二六年 文英堂書店)。

27 『柳宗悦全集』第四卷 一九八一年六月 筑摩書房 一九五頁

28 出典は、『名古屋のころ』(『文学手帖』第一集 一九四九年九月

文学手帖社 八四頁)である。『永瀬清子資料目録―図書』(二

〇〇二年三月 熊山町教育委員会 一一八頁)には富田碎花訳

『草の葉』(一九二〇年二月 大銀閣)があるが、これは第二卷

であり、第一巻は前年に刊行されている。したがってこれら全二

巻を読んだ可能性がある。この他に永瀬清子が手にする可能性が

あつたホイットマンの詩集の訳本は、国立国会図書館編『明治・

大正・昭和翻訳文学目録』(一九七二年 風間書房) より次の六冊

がある。白鳥省吾訳『ホイットマン詩集』(一九一九年 新潮社)、

有島武郎『ホキットマン詩集』一集(一九二二年 叢文閣)、白鳥

省吾『泰西社会詩人詩集』(一九三三年 日本評論社)、有島武郎

『ホキットマン詩集』二集(一九三三年 叢文閣)、『有島武郎全

集』第八卷(一九二四年 叢文閣)、松山敏『世界名詩選四卷』

(一九二五年 文英堂)である。

また、佐藤さち子が評論「永瀬清子の詩と詩論」(『コスモス』

第三卷第一号 一九四八年一月)で、永瀬清子とホイットマンの

共通点を「万人に通じうるひとりをうたおうとしている」点と考

え、両者の差異については「ホイットマンの限界性をも考えあわ

せることの必要」を指摘している。この指摘はさらに考察を深め

る必要があると思われる。

29 「ホキットマン詩集」『有島武郎全集』第八卷 一九二四年一〇

月 叢文閣 三四〇頁

30 「麵麩」のころ」『ユリイカ』第二六卷第四号 一九九四年四

月 九四頁

31 「ノート」『麵麩』第二卷第七号 一九三三年八月 麵麩社 三

三頁

32 注15に同じ 二五頁

33 注31に同じ 三三三頁

34 一九七頁・二〇二頁

〔付記〕同人誌『五人』は確認困難な資料であつたにも関わらず、熊山町教育委員会学芸員の羽原幸子氏の御尽力により、第一集と第三集から第八集まで確認することができました。ここに記して御礼申し上げます。

(しらね なおこ／平成十五年度博士前期課程修了)